

研究論文

坂東巡礼者と一般的信頼

Generalized Trust of Bando Pilgrims

小藪 明生 Akio KOYABU

東洋英和女学院大学 人間科学部
Toyo Eiwa University, Faculty of Human Science

要 旨

本論文では坂東巡礼者に対するアンケート調査の分析を通じて、一般的信頼がどのような要因と関連するのか、またこの項目に関して一般の大規模調査の結果との比較から坂東巡礼者はどのような特徴をもつのか、について分析した。クロス集計の結果から一般的信頼は、①動機の点からは他者との交流を目指す人で高く、精神的ゆとりのなさに関連する項目で低くなる、②四国巡礼の経験者で高くなる、③巡礼への満足度と関連すると考えられる再巡礼意欲が強い人で高い、④インタビュー調査への協力的な人で高い、といった傾向が見られた。また、多変量解析の結果、巡礼者の実際の経験の満足度との関連が高い②と③の項目で安定して有意差が見られた。

Abstract

By using questionnaire survey data obtained from Bando Pilgrims, I analyzed some of the determinants of Generalized Trust. In the first instance, to sum up from tabulation, I find that the strongest factors associated with Bando Pilgrims who trust others are: (1) having motivation for interaction with people in the roadside, and not having motivation for cure of disease or mental training; (2) having an experience in Sikoku Pilgrimage; (3) willing to pilgrim again; (4) being ready to respond to interview survey. In the next place, having an experience in Sikoku Pilgrimage and willing to pilgrim again stably show significant difference in multivariate analysis.

1. はじめに

本論文の目的は、坂東巡礼者に対するアンケート調査の分析を通じて、一般的信頼がどのような要因との関連するのか、またこの項目に関して一般の大規模調査の結果との比較から坂東巡礼者はどのような特徴をもつのか、について分析することである。

一般的信頼とは個人が持っている人間一般に対する信頼の基本的なレベルを示すものとして、認知科学や心理学から社会科学まで広く注目されている概念である。この概念は個人の社会生活上の情報処理・意思決定における基本的態度を規定するものであり、かつその個人が埋め込まれている社会集団の文化的背景に影響されるものとして重要である。

これまでの研究では一般的信頼の基本的性質については、国レベルのランダムサンプリングで得られた大規模調査データから分析されてきた。ここでは近年「スピリチュアリティ (Spilituality)」の研究からも注目されている巡礼者に対して行われたデータから分析することで、人々の一般的信頼のレベルを規定する要因について新たな知見を得ようとするものである。

2. 先行研究

一般的信頼については主に、「社会関係資本 (Social Capital)」(以下 SC と略す) の文脈から注目を浴びている。SC 指標のなかでも一般的信頼に関する質問項目は、幅広い国や地域で、経済発展・組織や行政のパフォーマンスといったさまざまな指標

との関連性が、他の社会参加・互惠性の規範といった項目よりも安定して見出されている^[1]。このような信頼が広くいきわたったコミュニティでは、人々の自発的協力によって集合行為のジレンマを回避しやすくなる、互惠的な関係性が生じさまざまな協力関係が可能となる、経済取引上のコストが安くなる、情報が流通しやすくなるため技術革新が起きやすくなる、などの効果があるとされる^{[2] [3]}。

一般的信頼に関する質問は、多少ワーディングや尺度に違いはあるものの、様々な調査で同様な質問が行われてきた。日本国内で行われた主な調査としては、大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所「生活と意識についての国際比較調査 (日本版 General Social Survey)」、内閣府国民生活局編「ソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」、などがある。日本を含めた世界各国に対する調査としては「世界価値観調査 (World Values Survey)」, 統計数理研究所による「日本人の国民性調査」・「東アジア価値観調査」、また、アメリカ国内の大規模な調査としては「GSS (General Social Survey)」などが有名である。

Putnam は、さまざまな指標を統合した SC 指数 (Social Capital Index) を用いて、全米 50 州の社会指標と統合 SC 指数との関連を分析している。その結果、統合 SC 指数が高い州では教育水準や健康度が高く殺人事件発生率が低いなど、様々な良い効果を持っているとされる。そして、この統合 SC 指数とそこに統合されている指標のうちのひとつである一般的信頼との相関は 0.92 と非常に高い値を示している^[4]。

統計調査のみならず、山岸を中心としたグループの一連の研究では、質問調査での一般的信頼の高さと、被験者の心理実験

ゲームにおける協調的な態度とに強い関連がみられること、高信頼者は単にお人好しで騙されやすいわけではなく、相手が信頼できる人間であるかどうかを正確に見極めていることを見出している^[5]。このことから、実際の高信頼者とは社会に関心が高く、参加経験が豊富で、社会的スキルが高い人である、と予想することが出来る。

アメリカにおける一般的信頼の規定要因について行った研究として、Alesina & La Ferrara は GSS データを用いた分析のなかで、信頼感を減少させる要因として、(1) 最近のトラウマ的な出来事（離婚・失業・親しい人の死等）、(2) マイノリティー出身、(3) 収入・教育レベルの低さ、(4) 居住地域の人種・文化的異質性が高いこと、収入格差が大きいこと、の四つを挙げている^[6]。

筆者の日本のデータを分析したから研究では、(1) 収入・学歴が高いこと、(2) 読書冊数が多く、テレビ視聴時間が短いこと、(3) 友人関係に満足していること、(4) 異質な他者に対して寛容であること、(5) スポーツ・ボランティアのグループなどに参加していること、(5) 生活を支える組織に対して信頼を持っていることが規定要因として見いだされた^[7]。

3. データ・仮説

3.1 データ

本論文では坂東巡礼調査（早稲田大学第一文学部社会学専修社会学演習Ⅲ D2007）の一環で行われた、坂東巡礼者に対するアンケート調査データを用いている^[8]。標本抽出は、第1段で札所地域を地域的に偏りが出ないように区切った後、計5札所を有意抽出した。このように抽出された札所に設置させていただいた箱に自記式にて記入・投函してもらう地点留置き・応募回収法を採用した。調査期間は2006年8月後半～11月後半までの約3ヶ月間となっている。回収数は694、うち有効票592。

調査項目は：①巡礼者の基本属性（性別・年齢・職業・現住所、開始時期、回った札所数、周回数、坂東巡礼以外の巡礼経験、同行者人数、同行者の内訳、インタビュー調査の可否）、②巡礼の形態（交通手段、交通手段選択理由、携行品、購入方法、購入場所、納経手段、巡礼費用、宿泊施設）、③巡礼者の意識（巡礼動機、巡礼知ったメディア、宗教信仰の有無、宗教的な心を大切さ、人に対する信用の有無、再巡礼意欲、巡礼で得たもの、自由回答）である。男女比は男性61.1%、女性33.8%、無回答5.1%。

3.2 仮説

基本的な理論仮説としては、先行研究に見られているように一般的他者に対する信頼感が高い人は、身近な他者やさまざまな集団や組織に対して、それらとかがわりあうことが自分の生活を豊かにすることであるという、市民的な積極的行動パターンの意義を知っている人であるというものである。そのため高信頼者は、家族・友人・さまざまな集団・組織に対して信頼感を持っており、集団で活動することに対する知識・経験を持つ

ていて、それらに積極的に参加し、メディア等からの情報の取り入れもよく行う、という人間像が想定できる。

以下の分析では比較対象の一般大規模調査として、大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所「生活と意識についての国際比較調査（日本版 General Social Survey）」（2003年）（以下、JGSS2003 と略す）の調査結果を主に用いている。

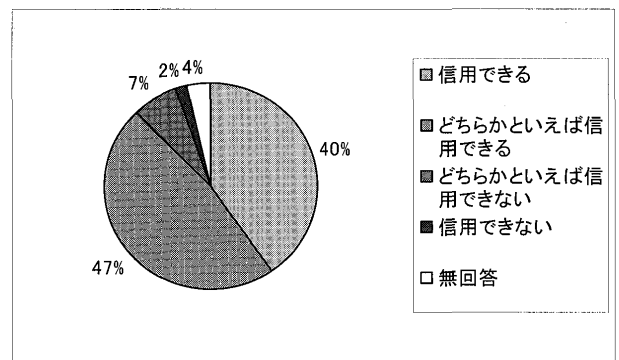
4. 分析

4.1 非説明変数の基礎集計

非説明変数の性質についてまず、他の大規模調査では中間的な回答に偏る傾向が強くでしまっている。例えば JGSS2003 では、「信用できる」21.0%、「どちらともいえない」67.4%、「信用できない」11.2%となっている。また内閣府の調査^[9]では「ほとんどの人は信用できる」から「注意するに越したことはない」の間で9件法が採用されているが、「5（両者の中間）」に28.6%が集中してしまっている。このことが、この質問項目に対する分析を難しくしてしまっている面がある。本調査ではこのような難点を回避するために、「信用できる」「どちらかといえば信用できる」「どちらかといえば信用できない」「信用できない」の四件法を採用している。

本調査における非説明変数の基礎的な回答分布状況は以下のようになっている。

表1 非説明変数基礎集計表



ここに見られるように、まず全体として「信用できる」「どちらかといえば信用できる」が全体の9割を占めており、前述の JGSS2003、内閣府の調査と比べて非常に高い割合の人々が、一般的他者にたいして楽観的な見方をとっていることがわかる。

近年よく用いられるようになった「スピリチュアリティ」という概念で語られる内容は、新興宗教から守護霊、前世占い、オカルト、超能力と非常に幅広いものとなっている^[10]。巡礼もその文脈で語られることが多いが、ここで見られるように、巡礼者は平均的日本人よりも高い信頼感を持っている。Putnam の社会関係資本の議論ではテレビ等の個人的な娯楽に多くの時間を費やすようになった結果、人付き合いをすることが少なくなり、結果として社会参加や一般的信頼を損なう、という連関が論じられている^[11]。

表2 男女別年齢層と一般的信頼

性別	年代		一般的信頼			
			信用できる	どちらかといえば信用できる	どちらかといえば信用できない	信用できない
男	20代	%	38.5	46.2	7.7	7.7
	30代	%	31.6	50.0	13.2	5.3
	40代	%	50.0	42.1	7.9	0
	50代	%	49.4	45.9	1.2	3.5
	60代	%	52.0	41.6	6.4	0
	70代以上	%	35.3	52.9	11.8	0
	合計	%	46.5	45.0	6.6	1.8
女	20代	%	23.1	69.2	7.7	0
	30代	%	26.3	52.6	21.1	0
	40代	%	50.0	50.0	0	0
	50代	%	25.4	61.0	8.5	5.1
	60代	%	37.7	54.1	8.2	0
	70代以上	%	10.0	80.0	10.0	0
	合計	%	30.9	58.4	9.0	1.7

ここから考えると、占いやオカルトや新興宗教といったものが個人やごく限られた小集団内での活動であるのに対し、巡礼者は家族・友人等と外出して沿道でさまざまな出自の人々と交わったり、文化・自然に触れることを自発的・積極的に行ったりしているという点で、平均的日本人よりも高信頼と関連する特徴を多く持っていると考えられる。

またSCの研究では、調査の回収率自体がその地域等社会集団のSCのレベルと関連しているとの議論がある。本調査は応募法であり、調査に自発的に回答していただいた方の一般的信頼が高いことについては、そのような点も指摘しておかなければならない。しかし、それを考慮に入れてもなお、この調査における巡礼者の一般的信頼の高さは特筆すべき点であると考えられる。

4.2 基本属性等

日本における年齢と一般的信頼との関連についてJGSS2003では、年齢層による大きな違いは見られない。本調査でのクロス集計(表2)からは、男女ともに30歳代で「信用できる」が減り「どちらかといえば信用できない」「信用できない」がやや増えているなど、年齢層によってばらつきが見られるが、これまでの他の調査と大きく異なるような一貫した傾向は見られない。

性別との関連では、JGSS2003のデータでも男性より女性のほうがやや低い信頼感を示すことが論じられている。今回の調査データから、女性で「信用できる」の割合がやや減り、そ

れ以外の項目の割合が増える傾向が見られる。このような傾向は多くの調査で見られるものであるが、その原因についてはよくわかっていない。

以上で見たように、一般的他者に対して悲観的な見方をする人(「どちらかといえば信用できない」「信用できない」)は合計しても1割程度であるため、これ以降の分析では「信用できる」「どちらかといえば信用できる」「どちらかといえば信用できない+信用できない」の3カテゴリで分析する。

職業について、「僧職」「学生」「その他」は、該当人数がそれぞれ2・6・16人しかいないため、ここでは分析から除外し、「勤め人」「自営業」「主婦」「無職」についてのみクロス集計を行った(表3)。結果は以下のようにになっている。「勤め人」と「無職」はほぼ全体の信頼感平均と同じ比率になっている。「無職」はその大部分が60歳以上で構成されており、定年退職者と考えることが出来る。「自営業」と「主婦」では前者で信頼感が高く、後者が低い傾向が出ている。「主婦」は全員が女性であり、女性全体の信頼感の比率と同じ傾向となっている。全体として、「自営業」でやや高い信頼感が見られる他は、職業による信頼感への影響はあまり見られない。

同行者人数について(表4)、5人以上のカテゴリで「信用できる」と「どちらかといえば信用できない+信用できない」のそれぞれが多くなっているほか、際だった傾向は見られない。大人数での旅行を楽しむような人は社会的であり一般的信頼が高い、といえるような結果とはなっていない。むしろ、「1人」のカテゴリで信頼傾向が低くはなっていないことが注目さ

表3 一般的信頼3カテゴリと職業カテゴリのクロス表

一般的信頼3カテゴリ		職業カテゴリ			
		勤め人	自営業	主婦	無職
信用できる	%	42.7	53.7	30.6	45.8
どちらかといえば信用できる	%	49.1	38.9	57.4	44.1
どちらかといえば信用できない+信用できない	%	8.1	7.4	12.0	10.2

表4 一般的信頼3カテゴリと同行者人数カテゴリのクロス表

一般的信頼3カテゴリ		同行者人数			
		1人	2人	3～4人	5人以上
信用できる	%	41.0	41.3	35.0	61.0
どちらかといえば信用できる	%	51.6	49.7	56.3	24.4
どちらかといえば信用できない+信用できない	%	7.5	9.1	8.8	14.6

表5 一般的信頼3カテゴリと他の巡礼経験のクロス表

一般的信頼3カテゴリ		他の巡礼経験				他の巡礼経験なし (無回答)
		四国巡礼	西国巡礼	秩父巡礼	その他	
信用できる	%	50.8	42.9	44.3	43.5	38.9
どちらかといえば信用できる	%	41.7	50.7	46.3	49.3	50.5
どちらかといえば信用できない+信用できない	%	7.5	6.4	9.4	7.2	10.5

表6 一般的信頼3カテゴリと巡礼の動機のクロス表

巡礼の動機	一般的信頼3カテゴリ		
	信用できる	どちらかといえば信用できる	どちらかといえば信用できない + 信用できない
	%	%	%
百観音巡礼の一環	44.1	49.7	6.1
信仰・修行	47.8	34.4	17.8
家内安全	41.0	51.5	7.5
病気の治癒	34.5	50.9	14.5
健康祈願	39.1	50.0	10.9
精神修養	39.7	39.7	20.6
自己を見つめ直す	39.6	49.6	10.8
観光・旅行・ハイキング	43.9	45.6	10.5
自然に親しむ	45.9	40.5	13.5
人との交流	52.8	41.7	5.6
全体平均(*)	41.8	49.3	8.9

* 一般的信頼質問への回答者全体の割合。「巡礼の動機」それぞれの合計値とは異なる。

れる。テレビ視聴時間が長いことは、外に出て人と付き合う時間を減らし、受動的な態度を強めるため、近年のSC減少の有力な原因のひとつであるとされる。ここにみられるように、一人ででも巡礼に出かけようという人々は一人で家にこもっているような人と比べ、それなりに高い一般的信頼を持っていると言えるだろう。

同行者の種類については、「自分一人」「夫または妻」「友人」がそのほとんどを占めるが、一般的信頼項目との関連はとくに目立ったものは見られなかった。

他の巡礼の経験について(表5)まず、四国巡礼経験者で「信用できる」の回答比率が高まっている。四国の巡礼は遍路と呼ばれ、他の巡礼と比べ接待などの沿道の地域の人々との交流が盛んに行われている。SCの議論では、ボランティアな集団に参加して人々との交流をする中で人付き合いの経験を積み、その意義を知ることによって一般的信頼などのSCが醸成されると論じられている。遍路での経験はこれと同様の影響をもたらしているのではないかと考えられる。その他の巡礼では特筆すべき傾

向は見られない。

坂東巡礼でこれまでにまわった札所数について、カテゴリ分けしたもののクロス集計の結果を見る限り、結論に近づくほど人間観が寛容になるような傾向は見られない。同じく周回数に関しては、1周目よりも2周目のほうが「信用できる」の割合が高まっているが、「3周目以上」では逆に「どちらかといえば信用できない+信用できない」の割合が増えてしまっているなど、周回を重ねるほど人間観が寛容になる、といったような傾向は見られなかった。

坂東巡礼に利用したおもな交通手段について、徒歩の方とその他の手段の方で比較が出来ると良かったのだが、回答者のほとんどが「自家用車」、「路線バス・電車」の二つに集中しており、分析が出来なかった。「自家用車」、「路線バス・電車」を主な交通手段と答えたグループでは目立った差は出ていない。交通手段選択理由についても同様で、人数が少なすぎてクロス分析になじまなかった。坂東巡礼は四国や西国と比べ歩き巡礼用の道が明確になっていないことや、札所同士が遠く離れているこ

表7 一般的信頼3カテゴリと巡礼で得たもののクロス表

巡礼で得たもの	一般的信頼3カテゴリ		
	信用できる	どちらかといえば信用できる	どちらかといえば信用できない + 信用できない
	%	%	%
人との関わり	37.1	54.7	8.2
自然との関わり	43.0	53.1	3.9
神・仏や超越的な存在	47.2	42.5	10.4
自分を見つめること	41.7	47.6	10.7
文化・歴史を知ること	41.0	51.0	7.9
全体平均(*)	41.8	49.3	8.9

* 一般的信頼質問への回答者全体の割合。「巡礼の動機」それぞれの合計値とは異なる。

表8 一般的信頼3カテゴリと再巡礼意欲のクロス表

一般的信頼3カテゴリ		再巡礼意欲		
		是非するつもり	機会があればまたしたい	これで最後にするつもり
信用できる	%	57.4	39.1	36.0
どちらかといえば信用できる	%	34.0	52.3	50.0
どちらかといえば信用できない+信用できない	%	8.5	8.6	14.0

表9 一般的信頼3カテゴリとインタビューへの協力の可否のクロス表

一般的信頼3カテゴリ		インタビューへの協力		
		はい	いいえ	無回答
信用できる	%	56.3	35.4	43.2
どちらかといえば信用できる	%	35.9	54.7	48.3
どちらかといえば信用できない+信用できない	%	7.8	9.9	8.9

とが原因として考えられる。

4.3 動機・価値観等

複数回答の巡礼動機についての項目のうち、30以上の回答数を得られた「百観音巡礼の一環」「信仰・修行」「家内安全」「病気の治癒」「健康祈願」「精神修養」「自己を見つめ直す」「観光・旅行・ハイキング」「自然に親しむ」「人との交流」の10項目について、信頼感とのクロス集計を行った(表6)。まず、「人との交流」を挙げたカテゴリで「信用できる」の比率が高まる傾向が見られる。この結果はSCの議論と合致するものである。次に、「病気の治癒」「精神修養」でやや信頼感が低くなる傾向が見られる。これらはその人が今現在何らかの問題点を抱えており、巡礼という経験の中でそれを克服していこうという動機のもと坂東を巡っている人と解釈できる。一般的信頼は人との交流だけでなく、経済的状況や社会的地位などと関連することが先行研究からわかっている。また、欧米の研究では身近な人の死や失業・離婚といったトラウマになる出来事に遭遇することは、一般的信頼感を低下させると報告されている。本論文の分析も、精神的なゆとりがないと高まりにくいものであるから、という理由が考えられる。

「巡礼で得たもの」の項目について(表7)、全体的に大きな

違いは見られないが、やや傾向が見られるものとしてまず、「自然との関わり」で「どちらかといえば信用できない+信用できない」群が減り、「神・仏や超越的な存在」で「信用できる」群が増えている点にプラスの効果が見られる。その他の群では信頼感の高低に特に目立った点は見られない。

再巡礼意欲について(表8)、「是非するつもり」で「信用できる」が増え、「これで最後にするつもり」で「どちらかといえば信用できない+信用できない」群が増えるという、比較的明白な傾向が出ている。巡礼で得た経験に満足したことが人間観にも好影響を与えているのか、もともと諸事に意欲にあふれている人が高い一般的信頼を持っているのか、にわかにはどちらとも断定は出来ないが、両者に好循環があると考えるのが妥当であろう。

インタビューへの協力の可否についてみると(表9)、「はい」と答えた群で「信用できる」が高くなっている。無回答群は平均とさほど変わらない。本調査は応募法であり、調査に回答していただいた方全員が基本的に協力的な方々であると言えるが、なかでも直接のインタビューに応じていただけるような方に高信頼者が多いことは、一般的信頼とボランティアな社会参加との関連を裏付けるものとなっている。

宗教信仰の有無との関連(表10)をみると、ほとんど差は

表 10 一般的信頼 3 カテゴリと宗教信仰の有無のクロス表

一般的信頼3カテゴリ	宗教信仰の有無	
	持っている	持っていない
信用できる	% 42.1	41.9
どちらかといえば信用できる	% 49.8	48.5
どちらかといえば信用できない+信用できない	% 8.2	9.6

表 11 一般的信頼「信用できる」群に対するロジスティック分析表

	model 1		model 2		model 3		model 4		model 5		model 6	
	p	Exp(B)	p	Exp(B)	p	Exp(B)	p	Exp(B)	p	Exp(B)	p	Exp(B)
性別(男性=1)	0.002	1.759	0.001	1.787	0.001	1.797	0.004	1.712	0.002	1.754	0.008	1.638
年齢(20歳代=1)	0.379	0.639	0.337	0.613	0.389	0.645	0.226	0.534	0.391	0.647	0.212	0.518
年齢(30歳代=1)	0.193	0.596	0.170	0.580	0.178	0.586	0.117	0.534	0.181	0.589	0.139	0.552
年齢(40歳代=1)	0.513	1.289	0.584	1.237	0.560	1.253	0.684	1.173	0.614	1.216	0.689	1.171
年齢(50歳代=1)	0.656	0.867	0.574	0.835	0.590	0.841	0.400	0.761	0.605	0.847	0.461	0.786
年齢(60歳代=1)	0.657	1.148	0.700	1.128	0.664	1.145	0.800	1.083	0.705	1.125	0.856	1.059
年齢(70歳以上=1)	0.244	0.617	0.249	0.621	0.250	0.621	0.137	0.535	0.210	0.593	0.115	0.513
四国巡礼経験(選択=1)	0.064	1.467	—	—	—	—	—	—	—	—	0.092	1.426
動機:「人との交流」(選択=1)	—	—	0.270	1.460	—	—	—	—	—	—	0.299	1.444
動機:「精神修養」(選択=1)	—	—	—	—	0.913	0.971	—	—	—	—	0.742	0.913
再巡礼意欲(「是非するつもり」=1)	—	—	—	—	—	—	0.001	2.163	—	—	0.001	2.138
インタビュー協力(「はい」=1)	—	—	—	—	—	—	—	—	0.061	1.645	0.117	1.532
定数 Exp(B)	0.467	—	0.502	—	0.509	—	0.496	—	0.490	—	0.284	—
標準誤差	0.280	—	0.276	—	0.277	—	0.277	—	0.277	—	0.284	—

N=592

Nのうち「信用できる」=238

出ていない。JGSS2003にある「信仰する宗教の有無」に関する質問では、信仰する宗教が「ある」と答えた層で、「ない」と答えた層よりも一般的信頼がやや高くなる傾向がある。本調査の対象者は特定宗派に属していないとしても、宗教的な心の大切さについては、全体の97%が「大切だと思う」と答えており、もともとの対象母集団が宗教に理解のあるものであるため、差が出ていないのかもしれない。

宗教的な心の大切さと一般的信頼の関連については、スピリチュアリティとの関連で興味を持たれる部分であるが、「大切だとは思わない」と答えた人数が16人しかおらず、クロス集計にはなじまなかった。

4.4 多変量解析

表11は、クロス集計の結果から一般的信頼と比較的明白な関連が見られた5項目(四国巡礼経験、動機「人との交流」、動機「精神修養」、再巡礼意欲、インタビュー協力の可否)について、性別・年齢の影響を調整するために、各項目についてダミー変数を作成してロジスティック分析を行った。従属変数として信頼感の3カテゴリのうち「信用できる」をダミーとし、「model 1」から「model 5」まではそれぞれ上記の5項目を一つずつ投入したモデル、「model 6」では全てを投入したモデルとして分析を行った。

ここでは複数の回答選択肢がある一般的信頼項目について、もっとも肯定的な回答のみをダミーとして分析を行っていることや、元のデータの性質の問題から、この結果が直ちに一般的信頼項目に対する様々な項目の全般的調整値と見なすことは出来ないが、主に性別・年齢およびその他の5項目との間の調整から、どの項目がロバストな結果を示すか、傾向を判断する

ことが出来る。

表の結果からまず、一般的信頼「はい」および年齢・性別と、それぞれを単独で調整した「model 1」から「model 5」まででは、四国巡礼経験、再巡礼意欲、インタビュー協力の可否の三つが有意水準を保っている($p < 0.1$)。また全ての項目を投入した「model 6」では四国巡礼経験、再巡礼意欲の二つが有意水準を保っていることがわかる。

指摘すべきは、動機に関わる二つの項目が有意水準となっておらず、四国巡礼経験・再巡礼意欲という、実際の巡礼体験に対する満足感に関わると考えられる項目が、安定した結果を示している点である。他者と積極的に関わろうという動機を持つことが、社会一般の人々をあえて信じようとする態度とつながることを、この結果から直ちに否定するものではない。しかし一般的信頼項目が、他者・社会・文化との関わりの経験の充実感との関連が深いことは、非常に興味深い結果であるといえるだろう。

5. まとめ

一般的信頼項目とのクロス集計、およびロジスティック分析の結果からまとめを試みる。

まず比較的明白な関連が見られた項目について考えると、まず四国遍路経験者で坂東にも挑戦するという人は、四国での経験から巡礼という行為に傾倒している人であり、また再巡礼意欲についても同様に、坂東巡礼にそれなりに満足感・意義を見出した人であると考えられる。これらのグループで一般的信頼が高まっていることから、さまざまな人や文化に触れ、そこに喜びを見いだすことが出来たという経験が、一般的な人間観に

も好影響をもたらすといえそうである。

つぎに動機で「人との交流」を選択したグループ、インタビュー協力の可否で「はい」を選択したグループで一般的信頼が高まるところから、やはり積極的に人と交流しようとする意思と人間観は SC の議論どおり関連が深いといえよう。

また本調査の対象者はとともに、坂東巡礼というメディアでも取り上げられることの少ないものに自発的に関与しようとする巡礼者である。私事化した余暇や消費に埋没するだけでなく、巡礼という文化やそれを支える人々・社会に興味を持ち、積極的に関わろうとする意思と、一般的信頼との関連が深いことを示しているといえよう。

6. おわりに

Fukuyama や Putnam など欧米の研究者は、近年の信頼感崩壊と再構築への展望を論じている。同様に日本人の他者への信頼とその社会的背景について山田は、彼の研究グループが行った調査では信頼派 32.3% に対して用心派は 63.8% にも上ること、時系列的には信頼が下降していること、諸制度への信頼も欧米より低い水準にあることなどがデータからみてとれることを指摘している。また、日本人の極端なまでの個人主義の進展などを確認する一方、信頼の回復の将来について論じている^[12]。

これまで一般的信頼の要因としては、身近な親しい他者との関わり、見知らぬ一般的他者との関わり、所属集団への愛着、身近な生活を支える社会諸制度への信頼、様々な人々とうまく関わる社会的スキル、社会的地位・経済的豊かさなど、様々な要素が関わっていることが論じられている。それと同時にどのような集団でも参加しさえすればよいわけではないという議論もあり、現実的に SC を醸成するためにはどのような施策が必要なのか、という具体的なメカニズムを明らかにすることが求められるようになってきている。

本調査で得られた結果からの分析は、巡礼文化との関わりを通じ、人々がそこから充実感を得ることで社会や人間に対する信頼を高めている可能性が示唆されている。いかにして SC・一般的信頼を高めるかという課題に対し、従来言われてきたようなボランティア集団への参加だけではない、文化への関わりというより幅広い論点を提供しているといえるだろう。巡礼という社会文化的な装置に参加することの意義について、今後このような新たな視点からより深く論じていく必要性があると考えられる。

[Acknowledgement]

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センター SSJ データアーカイブから〔「日本版 General Social Surveys < JGSS-2003 >」(大阪商業大学比較地域研究所、東京大学社会科学研究所)〕の個票データの提

供を受けました。

The data for this secondary analysis, “name of the survey, name of the depositor,” was provided by the Social Science Japan Data Archive, Information Center for Social Science Research on Japan, Institute of Social Science, The University of Tokyo.

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて(1999-2003 年度)、東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである(研究代表: 谷岡一郎・仁田道夫, 代表幹事: 佐藤博樹・岩井紀子, 事務局長: 大澤美苗)。東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センター SSJ データアーカイブがデータの作成と配布を行っている。

参考文献

- [1] Knack, Stephen, Keefer, Philip: Does Social Capital Have an Economic Payoff? A Cross-Country Investigation, The Quarterly Journal of Economics Volume 112, pp. 1251-1288, (1997).
- [2] Healy, Tom, Côté, Sylvain: The Well-being of Nations: the Role of Human and Social Capital, Paris: Organisation for Economic Co-operation and Development, (2001). 日本経済調査協議会(訳):『国の福利: 人的資本及び社会的資本の役割』, 日本経済調査協議会, pp.88-107, (2002).
- [3] Putnam, Robert D, (with Robert Leonardi and Raffaella Y. Nanetti): Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy, Princeton University Press, 1993. 河田潤一(訳):『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』NTT 出版, pp.99-231, (2001).
- [4] Putnam, Robert D: Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community, Simon and Schuster. 柴内康文(訳):『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』, 柏書房, p.357, (2006).
- [5] 山岸俊男:『信頼の構造 ことと社会の進化ゲーム』, 東京大学出版会, pp.9-29, (1998).
- [6] Alesina, A, Eliana La Ferrara: Who trusts others?, Journal of Public Economics 85, pp.207-234, (2002).
- [7] 小藪明生・濱野強・藤澤由和:「ソーシャル・キャピタルにおける一般的信頼の規定要因に関する検討」, 新潟医療福祉学会誌 Vol.6 No.1, pp.48-55, (2006).
- [8] 早稲田大学第一文学部社会学専修社会学演習Ⅲ D2007:『現代における坂東三十三所観音巡礼』, 早稲田大学第一文学部社会学研究室, pp.21-58, (2007).
- [9] 内閣府:『コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書』, 日本総合研究所, p 資 2-3, (2005).
- [10] 伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編著:『スピリチュアリティの社会学—現代世界の宗教性の探求』, 世界思想社, (2004).
- [11] Putnam, Robert D: 前掲書 [4], pp.338-343.
- [12] キサラ, ロバート・永井美紀子・山田真茂留編著:『リベラ・シリーズ 9 信頼社会のゆくえ 価値観調査に見る日本人の自画像』, ハーベスト社, pp.9-39, (2007).